

「真の国際人」を目指して

東京大学未来ビジョン研究センター 特任教授

竹本 和彦

Takemoto Kazuhiko

2019年4月より現職。東京大学に奉職する前は、国連大学サステナビリティ高等研究所所長(2014-2019年)、また、環境省において気候変動、生物多様性、3R・資源循環といった環境問題に関する国家戦略など、持続可能な社会実現に向けた政策立案に従事。OECD環境政策委員会副議長(2004-2007年)、国際応用システム分析研究所(IIASA)理事(2011年より)などを歴任。内閣府「自治体SDGs推進評価・調査検討会」委員及び「SDGsステークホルダーズ・ミーティング」構成員。工学博士(東京大学)。



これまでのコラムでは、世の中の変革のダイナミズム、「3Rイニシアティブ」誕生の背景及び国際会議の舞台裏について気の向くままに綴ってきた。今回は、このシリーズの締めくくりとして、「真の国際人とは」という課題に対し私の思うところを綴ってみたい。

一般に、「国際人とは」と聞かれて真っ先に思い浮かぶイメージは、「英語(又はその他の外国語)を巧みに操り、海外の人達との円滑なコミュニケーションを通じて仕事をこなしていく人」というのが大方の相場観であろうか。

確かにここでいう語学力と円滑なコミュニケーションは密接に結びついている。語学力が伴わなければコミュニケーションもままならないであろう。しかしながら語学が堪能というだけで円滑なコミュニケーションが確保されるかといういささか疑問である。

しからば国際的文脈におけるコミュニケーション力というのはいかなるものであろうか。コミュニケーションにとって大切なことは常に対象となる相手が存在することである。対象となる相手はもちろん時と場合によって多様であるが、一貫して言えるのは、まずは相手の懐の中に入り込み相手の関心をひきつけ、その上で自分自身の主張したい

ことを相手側に確実に伝えることであろう。

またコミュニケーションは必ずしも1対1とは限らない。いわゆるマルチの場合はなお困難が多い。こうした場において、やはり語学力がものをいうこととなる。すなわちバイ、マルチを通じてスムーズな対話ができる語学力をベースに、相手が心を拓くに十分なオープンな態度で臨むことが肝要である。さらには、このような態度を裏打ちする人柄すなわち人間力そのものが問われてくるのではないと思われる。

このためには、国際的な場での経験の積み重ねがものを言う。そして出来るだけ若いうちに経験を重ねることが重要である。このため若いうちの留学や海外での就業経験は紛れもなく貴重である。自分自身を外の世界に晒すことは、自らを見つめなおし、自分力を磨く格好の機会となるとともに、語学力も自ずと身に着くことにもなるであろう。

こうしたことが総合化されて語学力と人間力が備わり、これらが相まって「真の国際人」への道に繋がっていくのではないだろうか。

できるだけ多くの若い世代の皆さんが外の世界と接する機会を増やし、各人に応じた多様な経験を通して、自分力・人間力を身に付けた人材として育てていくことを心より願っている。